
とある最低系オリ主の母の一生

uyr yama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある最低系オリ主の母の一生

【Nコード】

N44530

【作者名】

u y r y a m a

【あらすじ】

オリ主の母親とはどんな存在なのか？

オリ主の悲しい過去を彩るTS転生者の一生を描いたお話。以前、理想郷にて投稿させて頂いた物の、加筆版です。

とある最低系オリ主の母の一生

「ほんと、気持ち悪い……」

心の底からの本気の言葉。

自分が産んだ息子に向かって言う台詞じゃあ、決してないと思う。
だからそれを聞いた周囲の人達が、ギョツとした目で私を見ても仕方ないのかもしれない。

そうして口々に言うのだ。

母親として失格だと。

だけでも、仕方ないじゃないか。

今の自分と同じ境遇に墜とされたら、誰でも同じ口トを言っているぞ？

余程のマゾでも無い限りさ……

私は、前世の記憶を持っていた。

残念な事に、強くてニューゲームって訳では無い。

私が12才の時、初潮のショックで前世が男だったことを思い出しちゃったってだけ。

今思えば、そこから不幸の始まりだった気がする。

16の時、幼馴染にレイプされた。

私は前世の記憶の影響からか、男には一切興味が無く、むしろ百合的な意味で女の子が好きだった。

小さい頃から一緒に過ごした隣家のお兄さんから、熱いアプローチは受けていたけれど、当たり前前のようにそれをスッパリとフったのだ。

だけでもそんなある日、両親が出かけて一人で留守番だった夜のこ
と、家に入り込まれ一晩中犯された。

泣き叫ぶ私に愛してると言いながら犯し続けたその男は、今では私の夫である。

憎くて恨めしい男なのに、何故？ と思うかも知れないけど、世の中そんなモノなのだ。

レイプされた私は、しっかり妊娠してしまい、それを知った両親が
激怒。

間違っな、レイプした男ではなく、私に激怒したのだ。

隠れてこそ淫蕩に耽っている放蕩娘だとも思っただろうか？
それともそんなの関係無しに、恥だとも思っただろうか？
いや、どっちも似たようなモノだ。

それはともかく、私が違う、隣の馬鹿に犯されたんだ！って言っても嘘をつくなど頬を叩かれる。

なんせ彼は巷で有名なスーパーエリート。世間の評判がはンばない。だから私を信じず彼を信じたのか、それとも別の何かの為なのか？
どちらにしろ、私の言葉は無視された。

更には、子供を墮ろしたいって言ったら私を犯したバカが、私を愛してる、結婚を許してくれなどと言いやがり、
もとより幼なじみって事は小さい頃からの付き合いな訳で、両親も、向こうの親もそれを勝手に決めやがった。

自分を無理矢理レイプした男と結婚するのは嫌だと、何度も何度も訴えた。

でもだ、聞きやしないのだ。

レイプ魔が言う耳に優しい言葉を信じ、私の訴えを一切耳に通さない。

この時、私は少し壊れてしまったのだろう。

それ以来、両親や周囲への感情は冷めた。

徐々に大きくなる腹の中身に恐怖して、周りを気にする余裕がもうなかったとも言っけれど。

墮ろしたくても許されず、気がつけば最早手遅れな所まで追い詰められて。

男は、出産の衝撃には耐えられない。

そんな俗説もあり、前世が男であった私は、怖くて、怖くて、怖くて……
泣いて喚いてヒスって暴れて、それを優しく宥めようとするレイプ魔に同情的な視線が集まり、逆に私には冷たい視線。
両親からはレイプ魔を褒め称える言葉を終始聞かされ、精神的に限界が達したときに、出産した。

陣痛、破水、そして、スルリと異物が私の中から出ていく快感。あれ程の快感、前世も含めて感じたことはなかった。

まあ、それから先の不快感を考えれば、そんな何の慰めにもなりはしないけど。

私の胸にシャブリつき、お乳を嬉しそうに吸いまくる乳児を見て、私はとつてもイヤな確信をしてしまったから。

このガキ、転生者じゃん。

産まれてまだ間もなく、目も殆ど見えず、耳も殆ど聞こえない筈の乳児が、その小さな目をギョロギョロさせる光景はあまりにキモイ。周囲の有象無象共の言葉に一々反応してみせて、特に海鳴と言う単語で喜びの雄叫びを上げやがった。

ああ、こいつ唯の転生者じゃない、オリ主だ……

この時の私の絶望が解るだろうか？

レイプ魔の親戚で、丁度同じように出産した忌まわしい原作キャラの桃子に何度も窘められながら、私は生きる気力を根こそぎ奪われ

た。

この子が長じるに従い、天才だ！ 神児だ！ などと褒め称える言葉
を右から左へと聞き流し、うつ病でノイローゼ気味の私は完全に
育児放棄。

なのにこのガキ、自分でメシを作って隣家に住むのはに振舞った
りしやがる。

10歳にもならないガキが、なんでこんな凄いメシ作れるんだよオ
カシイだろお前らなんで疑問にもたないんだよ死ねバカ。

「ホント、アナタは何であんな良い子に、そんな酷いことを言うの
かしらね……？」

イヤミったらしく言うのは、レイプ魔の母親。

いわば私の姑だ。

それに対して桃子がさり気なく庇ったりはしてくるけど、私の心は
冷たいまんま。

「酷いかな？ レイプ魔の息子を愛せって言われても、どうしたら
愛せるのか分からない」

姑の目は、嫌悪のまま私をギンと睨みつけた。

ここで初めて桃子が私に驚きの視線を向けたのだ。

「どう言うこと……？」

彼女が驚きに目を見開いたまま私にそう問いかけるが、もう遅い。私は姑に手を引っ張られ、自宅へと連れ込まれる。

そのままボタンと扉が閉まり、私は諦めきつた溜息を吐きながら部屋へと帰るのだ。

ベッドに身体を横たえながら、私は世界を呪詛し続ける。

滅びてしまえ、こんな世界。

ジュエルシードでも闇の書でもなんでもいい。

私ごと、すべてを滅ぼしてしまえ。

窓の外から見える隣家の庭で、私の子供の皮を被ったナニかが楽しげな歓声を上げた。

ハーレムだの、魔王だの、フェイトそんだの、はやてたんだのヴオルケンハーレムだの馬鹿なことばかり言う、一応は私の息子。

ホント、少し痛い目をみたらいいのに。

それとも私にだけ厳しい世界なのだろうか？

少なくとも、私にどんな目で見られても気にも止めない気づきもしないこの子にとって、優しい世界であることは確かだろう。

ほんの少しだけ『息子』に優しい目を向けた私は、だけでも次の瞬間には何も写さない伽藍洞。

昼は姑の嫌みを聞き、夜はレイプ魔に犯されて、朝は異常者な息子を学校へと送り出す。

延々と、延々とその繰り返し。

早く、終わればいいのにな……

この、魔法少女リリカルなのはの世界が、終わればいいのにな……

そんな、辛く苦しい日常に、ほんの少しだけ光りが灯る。
姑が亡くなったのだ。

監禁を解かれた私は、事情を察してくれた桃子のお陰で、この先の人生に希望を見出す。

紹介してくれた弁護士と相談所……そして、就職先。

「……ありがとうね、桃子」

「ううん、気づかないでいてゴメン……」

沈痛な顔で頭を下げる彼女に、私はアノ男に犯されて以来、初めて心が暖かくなるのを感じた。

私の頬を伝う涙は、心の氷河が溶ける涙。

もしも私が前世のまま男であったなら、彼女の夫から桃子を奪ってしまったかも。

私は前世のコトを抜きで、その事を彼女に伝えると、

「ふふ、ダメよ？ 私は土郎さんを愛しているもの」

「あーあ、それは残念ね」

なんて2人で笑い合った。

隣家の幼馴染のお兄さんに一晩中犯されて、私は絶望した。

両親に裏切られて、私は絶望した。

憎い男の子供を妊娠している事実には、私は絶望した。

無理矢理結婚させられて、私は絶望した。

生まれて来た子供が最低系オリ主だったことに、私は絶望した。

これらに比べれば、全然小さいけれど、姑や周囲の冷たい視線に、私は絶望した。

でも、私はようやく幸せになれるかもしれない。

世界よ滅びろ！　なんて中二っぽい呪詛を吐いていた私が……

「あの人を憎むのは仕方ないわ。あの方はそれだけのコトをアナタにしてたんだもの

でもね、子供は別でしょ？　憎い男の子供かもしれないけれど、それでも確かにアナタの子供なのよ……」

桃子は何も知らない。知らないから言えるんだ。
でも、うん、確かに気持ち悪いとは思うけど、アノ子は、私の子であることには違いない。

私は、コクリと、ゆっくりだけど確かに頷いてみせる。
裁判になっても、子供の親権を争うつもりはなかった。
だからあの子は、あの男の下で育つのだろう。

歪んだ心を、そのままに……

人は、自らに余裕があるなら、他人にも優しくなるものだ。
この時の私は余裕があって、だからアノ子の未来を思ってしまう。

最低系オリ主一直線の、アノ子を……

翌日のこと、私はアノ子を誘って買い物に出かける。

それまで姑がしてたご飯の用意を、離婚調停が終わるまでの短い間だけ、私がこの子のためにしてあげたいと思ったからだ。

手を繋ぎ、微笑み掛ける私に、この子は少しだけ戸惑った様子で、でも、ギョッと手に力を込めてきた。

そして、少しづつ、その顔が笑みで埋まっていく。

ああ、この子が歪んでいるのは、私のせいもあつたのだな……

やっぱり、この子を引き取るうか？

それは、前世が男だった私の父性と、今生が女である私の母性が入り混じった不思議な感情。

この日の夜は、前世の経験からくる最低限の料理技能で、それでも愛情がたつぷりの夕食が出来たと私は思う。

だって、満面の笑みで、本当に美味しそうに食べてるもの。

この子の作る料理に比べたら、足元にも及ばない味なのに、それでも、本当に美味しそうに、嬉しそうに……

でも、幸せは続かないのだ。

突如、世界が止まる。

焦りを見せる息子と、何が起こったのかワカラナイ私。

「ゴメン、母さん！　ここでジッとしててー！」

私の返事も聞かずに、そのまま窓を開けて外へと飛び出す息子。
私は窓へと駆け寄り、外を見る。

……炎を纏う剣を持った女性と、そんなのと真っ向から戦っている
息子の姿。

ヴォルケンリッター？　今は闇の書編だったんだ。

息子とシグナムと思しき女性は、激しく鏝迫り合いをしながら怒鳴
りあい。

そして、2人揃って私の方に視線を向けた。

息子は少しだけ苦い表情をした後、首を縦に振り、剣を引いた。

「すまない、ご母堂の身の安全は保障する……」

シグナムがそついうと、息子は私に背を向ける。

シグナムはそんな息子に、もう一度すまないと呟くと、私の方へと
飛んできた。

そして、彼女の手が、私を貫いた。

私は、この子に、売られた、の……？

今日は12月24日、クリスマス・イブ。

初めて息子と過ごした日は、最低で、最悪なクリスマス。

でも、それも仕方無いかもしれない。

今迄私は、この子を顧みなかったから。

だから私は、この子に売られたのだ。

八神はやてと天秤にのせられ、アノ子の天秤ははやてを選んだのだから……

激しい痛みと絶望に絶叫する私は、最後にチラリとこの物語の主人公であった筈の少女が突入するのを見て、意識を失った。

その日、彼女は管理局に保護される前に、結界を破って突入して来た彼女の夫に、衰弱した状態で保護された。

そのまま彼の手によって病院へと搬送された彼女は、意識を失ったまま目を覚ます事は無く。

医者もなんでこうなったのか分からずにサジを投げた。

彼女の息子や、隣家の娘はどうしてそうなったのか知ってはいたが、堅く口を閉ざしたまま。

生きる気力を再び根こそぎ失った彼女は、徐々に、徐々に、身体を弱らせ……

そうして年も改まり、祝いに満ちた世界の中で、彼女は26年の生涯を閉じる。

オリ主の不幸の歴史に、彩りを添える為だけに……

私の傍にずっと居た、電波的なアナタ

兄が死んだ。

横断歩道を横断中の小学生を暴走トラックから守り、代わりに自分がはねられて死ぬなんて、どこかの二次創作に良くある展開で。きつと今頃、どこかの世界に転生してオリ主にでもなっているんだろう。

なんて私は夢想する。

あの人は本当に凄い人だったから、どこの世界に行っても、きつと立派にオリ主としてやっていけるに違いない。

この現実と言う無慈悲でツマライ世界でも、十分にオリ主だった彼のコトだから……

眉目秀麗にして頭脳明晰、スポーツツ万能。
才色兼備とは彼の為にあつた言葉だ。

私はそんな彼を、誰よりも愛し、慕い、そして……

この世界で唯一の私の味方。
平々凡々な私のたった一つの誇り。

こんな傷物である私にとっての、たった一つの、誇りだったのだ。

なんせ私は、見ず知らずの男達の集団に浚われ、一晩中慰み者になっ
てしまった女。

ある日の朝、私は男共の体液塗れの状態で発見され保護される。

そのまま病院に運ばれ入院した私は、警察に呼ばれ駆けつけた両親
から罵倒された。

その上、こんな状態になってしまったと言つのに、被害届は出され
なかつたのだ。

わざわざ自分から『傷物』だなんて言う必要は無い！

こんな風に言われて。

悔しかった……

辛かった……

悲しかった……

でも兄さんは、街のチンピラに犯され傷ついた私を、たった一人親
身になって慰めてくれた人。

私の心をスタスタにした両親なんかとは違って、そんな彼らを本気
で怒鳴りつけ、私に代わって殴ってくれた人だ。

ああ、このお腹の中に居る子供が、あの人の子供だったらどんなに良かったか。

たった一人の味方を亡くし、誰の子かすら分からない子を腹に宿し、両親からは侮蔑の視線を投げられる。

周囲から聞こえてくる声が、全部私を嘲る声に聞こえて、もう、生きていくのが辛いよ、兄さん……

兄さん、どうして私を置いて逝ってしまったの？

部屋の外から声が聞こえてくるんです。

兄じゃなくて、妹の方が死ねば良かったのに！

両親だけじゃない、親戚一同、うっん、この世全ての人達がそう言っている。

私も、そう思う。

だから私も逝こう。

あの人の待つ場所へと……

私は部屋の天井に備え付けられている照明器具を外し、電気コードを剥き出しにする。

そしてそれに引っ掛けるようにして幾重にも重ねたパンストで輪を作ると、自分の首をその輪に通した。

さようなら、クソツタレな世界。

今、逝きます、兄さん。

私が、この世で一番愛する人。

私が、この世で最も憎んだ人。

ガタン、と足を掛けていた椅子が倒れ、首に括られたパンストが咽を絞める。

糞尿を撒き散らし、コトによれば腹の子まで外に捻り出し、少しはあの両親への嫌がらせになるのでしょうか……？

少しでいいのだ、ほんの少しで。私は、アノ両親や世界に嫌がらせをしたかったのだ！

なのに、私は何も出来ずに死んでいく。

この世全てが腐り果て、のた打ち回ってそして死ね。

こんな感じで呪詛を吐き、私はきっと死んだのだろう。

そんな 夢を 見た

夢……だよな？

だって、だってだって……！

お〜め〜で〜と〜！ 君は実に 番目の自殺者なんだ。
そんな君に大サービス！

気づくと、間違いなく脳が膿んでるおっさんに、訳の分からない事を告げられた。

ハハハ……夢だ。やっぱり夢だ。夢でもなければ……こんな、こんな……

でも、でもだこれってもしかして、もしかするんだらうか？

そーだよー。私が、神です。さあ、君の望む世界へと、ポーン
ナス付きで転生させて上げよう！

その時の私の胸に過ったのは、間違いなく、暗い歓喜。

良く有る定番のメニューを告げられた私の望みは、大好きな兄との再会。

そして、そんな兄に、私だけを見てもらうことだった。

「兄と私を転生させて下さい。そして、私を兄の様な男に、兄を女に、そうすれば、私は、私は、わたしはっ!!」

うーん……中々難しいこと言ってくれるねー。とっくの間
に死んで成仏しちゃってる人呼び戻し、そして君の奥なる願い……

いいけどさ、その代り、ペナルティーが入るよ？

「それはなんです……?」

君たちは、これからボクの暇つぶしの為に送られる存在の、
苗床になるんだ。

ああ、そんなのはどうでもいい。

私のように汚れ、私のように望まぬ子を宿し、そして私に支配され
たアナタを見たい。

いや、違うのかな？

そんなアナタが、それでも私を愛してくれるなら、私は本当の意味で幸せになれる気がする。

だって、兄さん。アナタは妹である私を愛しているのでしょうか？

だから兄さん、私を見てよ！ 私だけを見てよ！

私だけを、

私だけを、

わたしだけを！！

これこそが、私の望む新しい世界。

たった今自殺したばかりの澱んだ心に、このおっさんのハイテンションは何処までもウザいけど、素直に私はこう言えた。

「いいよ。だから、ありがとう」

兄さんが死んでから、初めて浮かんだ満面の笑み。

私の笑みに、邪悪に嗤う神を名乗るおっさん。

でも私の胸は感謝でいっぱいだ。

じゃあね。お幸せに……

「ええ、きっと私は幸せに……」

光が溢れ、意識が白く、白く、どこまでも白く……

私は転生を果たす。

強くてニューゲーム状態で生まれ変わった私。

願い通り男で、そして才色兼備、国士無双。

性格は務めて良く見せて、ご近所付き合っても完璧だ。

そうして私が8歳に成った時、遂にアノ人がこの世界に転生した。
前世の両親に良く似た隣家の若夫婦が産んだ、女の赤ちゃん。

一目見た時に私には解った。

その子は兄の転生体で、更には前世の記憶を持ち合わせていない事も。

ならば私がしなければならぬ事は簡単だ。

隣家の夫婦の信用を得て、そうしてこの子を力づくでモノにする。

その為に私は男に生まれ、その為に兄を女にして貰ったのだ。

それからと言うもの、私は日々自らをあらゆる意味で鍛え続け、同時に周囲の者達から信頼を得る為の行動を本格化させた。

そうこうしている内に少女は初潮を迎え、記憶を取り戻す。

クツクツと嗤う。

これで準備は整った。

「い、やだ……っ！ やめて！ イ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！……！」

ギチ……ギチギチギチ……ブツンっ！

「ぎゃああああああつっ……！」

固い肉が擦り合う音に、そして何かをぶち破る衝撃に泣き喚く、私の身体に押し潰されている少女のつんざくような悲鳴が耳に心地好い。

ぐしぐし泣くアナタの身体の胎内は、とても柔らかく暖かい。

衣服をビリビリに裂かれ、顔を涙と涎で汚し、まるであの時の私みたい……

泣き叫ぶ少女の聲に、身体をどこまでも昂ぶらせながら、私は『兄さん』の身体を貪りつくす。

私は、初めてアナタを見た時から、すぐにアナタが兄さんだって分

かった。

でも、アナタは私に気づかない。

私は前世のアナタのように、頭脳明晰、スポーツ万能の才色兼備。

滓のような両親の称賛。

愚昧共から浴びせられる嫉妬。

そして、アナタの私への無関心。

「や、だ……もう、やめてよ……なんでこんな酷い……」

酷い？ 酷いのはアナタだ！

ああ、憎い……！

なんで気づかない、なんで気づいてくれないの！

私はこんなにアナタを愛しているのに……！！

前世での優しさは偽りだったの！？

そうじゃないというのなら、私に気づけっ……！！

心が昂ぶる。行為が尚一層激しくなっていく。

前も後ろも、口も胸も髪も顔も……全部ぜんぶ、私の匂いで一杯に埋め尽くす。

でも、どうしてかな？

ドロドロのグチャグチャになったアナタは、同じようにチンピラにされたはずの私に比べ、なんだかとてもキレイで美しく……

「愛してます、私だけのアナタ……」

「わたしは……わたしだけの、もの……アナタなんて、大嫌いっ！」

これだけ犯され、心を弱くしても、それでも私を否定するアナタ……

……！

なんで私を受け容れない！ どうして私なんだと解ってくれない！

だから私はアナタを閉じ込めよう。

大事な宝物のように、大切に閉じ込めるのだ。

アナタが私に気づくまで、私はアナタを毎日犯す。

心も身体も、みんな犯す。大切に、アナタを犯します。

アナタが好きだから。アナタを愛しているから。アナタを憎んでいいのは私だけだから。

だからアナタは私だけを見て、感じて、想ってください。

私もアナタだけを想うから。だから、ねえ、私を見てよ、にいさん

……

この後、私とアノ人は結婚する。
アノ人はそれを嫌がったけれど、そんなのは無駄。
大部分の大人が見るのは世間体。

今生の私は眉目秀丽才色兼備。世間の評判も上々な優等生で将来性も抜群。

そんな私と、前世での反動なのか？ アナタは優秀な姿を一切見せなかつた。

でもね？ 解る人にしか解らないその優秀さは、世間からみたらどう映るでしょう？

事実、アナタの両親は、アナタじゃなくて私を信じた。

だからアナタは私の張った蜘蛛の糸に絡め取られ、これから毎日その身体に私を刻み込むことになるのだ。

嫌がり、泣き喚くアナタを毎日毎日……合法的に、誰に責められることもなく、アナタを私だけのモノに……

それはどんなに甘美なのだろう？ どんなに地獄なのだろう？

「ねえ、いつまでこんな事を続けるつもり？」

「いつまで？」

それはアナタが私に気づくまで。

それだけで、私は満足出来るのだから。
その日を夢見て、私は今日もアナタと褥を共にする。

そんなアナタがポツリと呟いた言葉。

「早く、終わればいいのにな……」

この、魔法少女リリカルなのはの世界が、終わればいいのにな……」

この世界って、リリカルな世界だったのか。

私はここで初めて気づく事実には、満足気に口元をほころばせた。

だってリリカルなのはなんて、兄さんは本来知らないはずのアニメのお話。

それを何故知ってるかというところ、前世の私が兄さんを誘って一緒に視たから。

ただそれだけの知識なはずなのに、私よりも先に気づくなんてと、久しぶりに私は心から笑ってみせた。

それは、確かな私への愛情の証に思えたから。だから、私は笑えたのだろう。

だからきつともうすぐだ。もうすぐアナタは気づいてくれる。

そして私だけを愛してくれるのだ。

2人の心が通じ合い、きつとこうして抱き合うのも更に心地好くなるはずだ。

嫌がるアナタを犯すだけでも、こんなにも気持ちがいいものなのに、これで気持ちに通じ合えたら……

ブルル、と身体が歡喜に震えた。

なのに……

なのに、なのに、なのになのににいつ!!

この世界の母が死に、段々と表情を明るくしていくアノ人に、私が期待に胸を焦がしていたある日。

自宅に、不可視のバリアみたいなのが張られているのに気づいた。

ここでようやく思い出すリリカルなのはのストーリー。

高町なのはは現在小学3年生。

そして今は12月。

もしかして、この結界を張ったのは、ヴォルケンリッター!?
そう思い至った瞬間、背中が熱くなる。

バサツ！ つと音を立てたかと思うと、背中には16枚の光の翼……
私はHGSだったの？ いや、そんなのはどうでもいい！

今はこの結界を破壊し、アノ人を救うことだけ考えなくちゃ……！
私は不可視の壁にむかって、光の膜がはった拳を叩きつける！
バリーン！つと、まるでガラスをみたいに容易く割れる結界。

瞬間、視線の先の世界に色が付き、その先に、胸を貫かれるアナタ。
ゆっくりと腕が引き抜かれ、その衝撃でそのまま地面へと倒れ伏した。

顔色は青く、生気が失せ……

私はアナタを抱きかかえると、病院へとむかって走り出す。

嫌だ、嫌だ、嫌だ……！

私を置いて行かないで！

私を一人にしないでよ！

でも、アナタは再び私を置いて逝ってしまった……
残されたのは、呆然と虚空を見上げる、私とアナタの子供だけ。

こんなのイライナイ。

私が欲しかったのはアナタだけなのに……

冷たくなったアナタの頬を何度も撫でさすりながら、私は自らの死
を考える。

そうすれば、またアナタにきつと会えるから。

だから死のう。私は死ぬのだ。そうして、今度こそ、アナタを私は
……

でもさ、その前にする事があるよね？

前世の私はただ死ぬだけだったけど、今生の私は……！

弔問に訪れた車椅子の少女の首筋に、カッターナイフを当てる。
そうして私は少女の家族に対してこう言うのだ。

「この子の命が欲しければ、貴様ら全員、死ね……！！」

息子と隣人の娘さんのヒュウツ、と息を吸い込む音が耳に入った。
少女の家族達は、顔を怒りと屈辱で強張らせる。

「主を少しでも傷つけてみる！ 楽には死なせんぞ、下郎ッ！！」

「はっ！ それはコチラのセリフだよ、ヴォルケンリッター。何よ
り、私の愛する妻を殺した責様らに、下郎呼ばわりされる謂れは無
い」

怒りに染まっていた顔が引き攣りを見せ、人質にとっていた少女が
大きく目を見開く。

ああ、聞かされていなかったんだね？
それとも、息子がこの事実を伏せたのかな？

あの子はオリ主だから、母親の死など糧にしか過ぎないのだろう。
それもまた、私達に架せられた苗床としての役割ではあるのだろう
と、今になって思うけど。

それでも私は、アノ人を殺された事に怒りを感じて止まないんだ。
アノ人の全ては私のモノだったのだから。

だって、それこそが私の生きる意味なんだもの。

「主を、はなせ……！ 貴方の妻を死に追いやった責は私にある！」

「何を言ってるんだ？ 責は、貴様等全員にあるだろう？ 臣下に
言うことを聞かせられなかった主と、主の制止があったにも関わら
ず、私の妻を襲った似非騎士共にさっ！」

空気が凍った。

屈辱からか、それとも後悔からなのか、シグナムはワナワナと震え、
眼光を厳しく私を睨む。

なんて不遜。あの人を殺しておいて、そんな視線を私にむけるなん
て……

私はこれ見よがしにカッターナイフを持つ手に力を込めた。

「ひっ……」

腕の中の少女から、恐怖で息を呑む声が聞こえた。

ああ、ウザイ。もういい。死ねよ。

よくよく考えてみたら、このガキ殺せばアイツらも死ぬよね？

あれ？ 死なないんだっけ？

それでもいいか。屈辱に生き延びる方が、奴らにとっては苦痛だろう。

シヤマルが私に何かをしようとしても、私の力がそれを阻み、何も出来ずに焦燥するこいつらを見るだけで、気分が少し晴れていく。

さあ、後悔しろ、狗どもっ！！

私ははやての首をかつ切ろうと力を入れた。

首の皮が切れ、血が流れ、そして……ズブリ！

私のバリアを越えて、オリ主である息子の持った槍が、私の胸を刺し貫いた。

「う、めん……なさ、い……とーさん……でも、こんな間違ってるよっ……！」

……お前はどつなの？ そこんところ少し詳しく言ってみなさい。血縁上の父親として、なんだかその辺りがとても気になる。

槍が勢いよく引き抜かれた衝撃で、私の身体は地面に這い蹲る。すでにはやてはヴォルケンリッターの手によって、安全な場所まで退避して、ブツブツと「ごめんなさい、ごめんなさい……」と、壊れたレコードのように繰り返す。

私の身体から凄いい勢いで血が流れ、意識が遠のいていくなか、最後の力で私を殺したオリ主を眺め見る。顔色を真っ青に、ぶるぶる震えていた。

そうなる位なら、初めからしなければ良いものを
まあ、もうどうでもいいか……

はやてもヴォルケンリッターも息子にも、最低限の嫌がらせは出来
たみたいだし。

だから私はもう逝こう。あの人待つ場所へと。

だから、「もう、いい……」

最期の言葉を吐き捨てて、私は2度目の生を閉じた。

「どう？ 満足した？ 幸せになれたかい？」

「いいえ。兄さんが私に気づくまで、私は満足なんかしやしない。幸せになんか、なれやしない」

「だったらどうする？ もう一度行くかい？」

「それが叶うのなら、何度でも、何度でも。ですが、いいのですか？」

「いいよ、結構面白かったしね。でもさ、またペナルティーがつくからね？ それでもいいかい？」

「内容にもよりますが」

「大丈夫。今度は君次第では死なずに済むさ……」

「そう、ですか……ならいいですよ」

「じゃ、いつてらっしやい」

「ええ、いつてきます」

3度目の生は孤児院で始まった。

有象無象に囲まれながら、私はアナタと出会った日を夢見てる。
今度の私は女かと、少しだけガツクリしながら。

「カタリナ、あなたの次の仕事は……」

そして、私は……

「ねえ、リアナさん」

「なあに、カタリナ？」

「お姉さまって、呼んでもいいですか？」

「おねえ……ま、いつか。いいよ、カタリナ」

「ほんとに！ 大好きっ、お姉さま！」

何度でも、私に気づく日が来るまで、私は、あなたの傍に居る。

蛇足　オリ主母の再びの転生　黒いマルスさまと私

「まったく、ニーナ様も見ろ目が無い。そうは思わないか？　ボクに任せておけば、アカネイアの復興なんて一瞬ですんだモノを。」

それにだよ？　そうすればボクの野望の道程も何割か省略できたんだ。まったく、あんなターバンなんかのどこが……

でもまあ、一度壊滅に近い被害を喰らっても流石は大アカネイアの官僚機構。ボクの思惑通りに事を運べるようになるのは一手間だったかもね。

そう考えると、こうして地道にアリティアから始める方が結果的には早くすむかも。

えっ？　何がって？　そんなの決まってるじゃないか？

大陸制覇だよ、大陸制覇。まったく、しっかりしてよね、ボクのアナ。

ねえ、シーダ。君もそう思うだろ？」

アハハ、と私の右横で楽しそうに笑うシーダ様。

そして一言。

「マルス様？ リアナは、わ・た・し・の！ 恋人ですよ？」

そう言つて2人顔を見合わせ、あははと黒く笑い合つた。

私はそんな2人にただただ頬を引き攣らせるだけ。

遠い遠い記憶の彼方。

そこの記憶にあつた2人の姿と全然違つ。

2人はとつても白いお方だつた筈なのに……

「ん？ どうしたんだい、リアナ？」

私の左横で寝そべっていたマルス様が、身体を起し心配そうに私の顔を覗きこむ。

見える！ 見える見える見えるって!？

何がって？ ナニがだよ!!

身体を起したマルス様のナニが、ぶらーんぶらーんって揺れているのだ！

前世の糞な夫の倍以上、前々世の私より大きいソレが……!!

「本当にどうしたの、リアナ……?」

今度は右隣で寝そべっていたシーダ様が、マルス様と同じように私の顔を心配そうに覗きこむ。

少し控えめで、でもとても形の好い双丘が、私の目の前でプルンって揺れた。

マルス様のナニと違って、とっても目の保養だ。

私はシーダ様のおっぱいを見ることで、色んな意味でダメージ受けまくった心を癒す。

すると彼女が急に、ハッと気づいたような顔をして「ごめんね、リアナ」と謝ってきた。

「リアナはまだ慣れてないものね？」

「ああ、そういう事が……ごめんね、リアナ」

2人仲良く微笑みながら、私に労わりの視線を向けてきた。

視線は私の目の位置から徐々に下がっていき、胸、腹、そして股間。血と精液に塗れて痛々しいアソコを、ジッと見つめてくる。

「ちよっ?! どこ見てるんですかッッ!!」

2人の意味深な視線から逃れようと、身体をくの字に屈ませ、自分の身体を覆い隠す。

そんな私を実に楽しそうに見ながら、

「どこって……ねえ、シーダ？」

「ねえ、マルス様？」

アハハ、ウフフと、とってもドス黒いお顔だ。

ああ……なんでこんな事になっちゃったんだろ……？

いや、分かってるんだよ？ ぜんぶ自業自得だってさ。

でも、前世でちよつとばかりイヤな思いしてたからさ、その、なんだ、少しはっちゃけちゃったんだよね！。

ホント、後悔先に立たず……

私は前々世と前世の経験から、とても男が嫌いだ！
前々世は男だったから、当然に女の子の方が好きだ！

そして前世……

隣の幼なじみのお兄さんに犯された挙句、妊娠。

そして嫌がる私の意志を無視してそのまま結婚、後に出産。

しかも産まれて来た子供がオリ主とか……

だから男なんて嫌いだし、子供ももう産みたくはない。

またオリ主が腹の中から出て来たら、私は今度こそ発狂する自信がある。

そんな訳で、割と早い時期に2度目の生まれ変わりがファイアーエムブレムの世界だと知った私は、2度と男の汚い欲望に負けないように、只管に武力を身に着けた。

上手い具合に祖父（流石におじいちゃんまでは嫌えなかった）がアリティアの騎士だったらしく、彼に修練をつけてもらったのだ。

途中グラの裏切りによりアリティアが滅んだりもしたけれど、そんなの私には関係ねー。

どうせスターロードマルス様がアリティアを解放して、この大陸をドルーアの魔の手から救い出すのだ。

だから逸る祖父を宥め、修行をしながらアリティア解放の時をジツ

と待ち続ける。

レトロゲーのくせに、やたらと完成度の高いこのゲームが大好きだったせいもあって、少しぐらいいはストーリーを覚えていたから。そう、この後アリティアは解放され、そして再び落ちるのだ。

マルスのかつての仲間、無敵モードのハーデインの手によって。でもだ、マルスはその名の通り軍神の化身。むかうところ敵なし！

私は次の大戦でマルス様一行に加わり、沢山の功績をあげたいと思う。

中世的なこの世界では、ぼーっとしてたら無理矢理結婚させられてしまうから。

そうならない為にも、無敵で素敵な女騎士になるのだ！

無理に結婚進めてくるバカを地位で蹴っ飛ばし、ついでに手にした武力で薙ぎ倒せる。

一挙両得じゃない！！

そんな訳で暗黒戦争と呼ばれた動乱後、私はアリティア騎士を目指して城に入る。

そして訪れる見習い騎士時代。

この時、私はカタリナ言う名の一人の少女に出会ってしまった。私は彼女と百合的関係になり、調子にのって私の小隊に配属されたセシルとまでも関係を結んだ。

可愛く！強く！とても聡明な女の子に囲まれた、とてもとても幸せな時間……

他のムサイ3人の小隊員を意図的に無視しながら、私は副官のカタリナと、突撃隊員のセシルとで、無敵の部隊を作り上げた。しかもこの2人、私の知る原作知識には『たぶん』いない。いや、居たとしても記憶に残らない程度の端役だろう。そんな所も私のお気に入りの理由である。

でも、新人騎士にしては超優秀な私達第7小隊は、マルス様の目に止まってしまい、そこからハードな訓練をさせられる事となる。特に暗黒戦争を潜り抜けた無敵のアリティア騎士団との模擬戦は、本気でシヤレにならん。

聖騎士カイン、ジェネラル・ドーガ、スナイパー・ゴードンの、私
が良く知る3人の騎士。

そして聞いたことがなかった、それでも無敵に強いアリティア騎士
達の群れ。

なんせこいつら、私達のクリティカルな攻撃をカインって弾くの
よ！

どんなに隙をついてもカイン、カインって……

来る日も来る日も、そんな化け物共にフルボッコされる毎日。

私達3人は女の子なのに……なんて嘆く暇もない。

疲れきってボロボロになるのが当たり前になったある日、天から天女が舞い降りた。

「今日の訓練の相手は、私がしますね」

なんか角の生えたペガサスに乗ったお美しい王女様。

マルス様の婚約者にして、暗黒戦争時、敵方の将兵を寝返らせまくった勧誘の達人。

訓練後、私は彼女と親しく話をし、そこから少しづつ、少しづつ仲良くなっていった。

女同士と言う気安さもあってなのか、彼女はとても無防備で、思わず、そのなんだ、手を出しちゃった。

私は知らなかったのだ。

敵を寝返らせまくるこの人が、心清いだけのお姫様なんかじゃないって。

そして私の主君、スターロードマルス様が、とてもとてもドス黒いお方だったなんてことを。

「回想は終わったかい、リアナ」

「うふふ、リアナって本当に可愛い！ ね、そう思いませんが、マルス様！」

「ああ、ボクもそう思うよ」

2人は和気藹々としながら、再び私の肢体を撫で回してきた。喉から甘い声が漏れだし、私は淫靡で快楽に満ちたこの現実を受け入れる。

前世と違って、完全に自業自得だし。

なにより、前世の夫の印象があまりに悪かったせいかな、マルス様には嫌悪感を感じなかったのだ。

男は嫌い。でも、シーダ様と一緒に、マルス様って限定だったら、まあ、いつか……

それに、後のアカネイア連合王国のトップの愛人って、この先の生活の保障としては申し分ない。

正妻であるシーダ様との仲も良好だし、このままいつちゃった方が良いのでは……？

問題は私と百合的關係にあるカタリナとセシルなだけど……なるようになれっ！

「さ、2回戦にいつうか」

「マルス様、明日はリアナの騎士叙勲式ですよ？ 疲れを残したら

大変です！　するならその後の方が……」

「ハハハ、大丈夫だよ。キチンと加減はするさ」

そう言うと、私の身体にズシンと乗ってくる。

「リアナ、キツクなったら言ってね？　すぐにこの下半身バカを蹴つ飛ばしますから」

「あ、はは……お願い、します……」

「いくよ、ボクのリアナ。ボクの……軍師。これからは、ボクの為だけにその特異な知識を使うんだ。いいね……」

「は、い……」

力なく返事をする私は、でも感じるのには前世のような絶望ではない。下半身のピリピリとした痛みと、それを越える凄まじい快感の波に浚われながら、私はこの世界の住人に本当の意味でなった気がした。

アリティア皇国を建国し、アカネイアの名を大陸から完全に消し去った初代皇王マルスに仕えた第二皇妃リアナ。

彼女は大陸統一後、アリティア皇国に対し反乱を起こした暗殺組織の首領カタリナと、死闘を繰り広げ勝利する。

そして後にアリティア大陸と名を改めるアカネイア大陸だけでなく、バレンシア大陸へと目を向けるマルス皇王の野心を押し止め、戦乱の火を広げずに済ませた功績は非常に大きい。

その功績により、彼女は 影の英雄 と詠われることになった。

「ねえ、カタリナ……もう、やめよう……?」

「いやです。お姉さまをアノ男から解放するまで、私の戦いは終わりません!」

「じゅめん……じゅめん……」

「ううん、に……さんが、私に気づいてくれたから、もう、私は、まん、ぞ……く……」

「あ、ああ、あああああああああああああああああああああ
あっっ！……」

本人は、そんな称号、喜びはしないだろうが……

アリティア王国皇王家を支える7つの公爵家。

タリス、ドルーア、マケドニア、グルニア、オルレアン、グラ、カ
ダイン

その内、タリスとドルーア、マケドニアを除く4つの公爵家を、彼女の子供たちが占めることになる。

彼女の3度目の生は幸福と後悔の連続。

それでも2度目の生とは違い、普通に産まれてきてくれた沢山の子供達と、

「ねえリアナ。満足したかい？」

「はい、マルスさま……」

「そうか、それは良かった」

「私が死んだら、妹と一緒に、埋めてください……」

「ああ、わかったよ。安心してボクのリアナ」

「マル、ス……さま……あ、りが……と……」

「おやすみ、リアナ。シーダと、そして妹さんにヨロシク言っておいて。ボクも、後ほんのちよつとだけこの世界の行く末を見たら、君たちの下へ逝くよ。だから、またね」

「は、い……また、ね……」

原作とは違う、それでも原作よりも好ましいと想ってしまった男に

愛され、穏やかに終わりを告げた。

彼女に、4度目の生はない。

妹が、満足してくれたから……

蛇足　オリ主母の再びの転生　黒いマルスさまと私（後書き）

この話、何故かプロットが現在理想郷で連載中のやつよりも完璧に出来てたりします（汗

ですんで、時がきたらコレを一話目として投稿するやもしれません

w

レジアスルートもスカさんルートも甘くない

人気がまるでなく、どこことなく薄暗い感のする家で、一人もくもくと箸をすすめて食事をとる。

メシを食うのが一人だなんて、いつものことだ。

以前はなのとは一緒に食べてはいたが、最近の高町家は家族団らんが基本だから仕方ない。

桃子さんは一緒に食べようと誘ってくれるけど、せつかくの家族の団らんを邪魔するつもりは毛頭なかった。

それにしても、美味しくねー。

前はあんなに美味しく感じたメシが、どうしてこんなにまずく感じるのだろうか？

そうか、味付けを間違えたんだな、俺は。だって、こんなにしょっぱいんだもの……

俺はスノツと鼻をすすりながら、滂沱のように流れる涙を乱暴にぬぐった。

ああ、わかつてる。そんなんじゃないってことぐらいはさっ！
神から貰ったEMILYAの力。そのひとつである料理技能。
こんなんで作られた料理なんかより、あの日、初めて母さんが作っ
てくれた料理の方が万倍美味いってことぐらいはっ！
決して上手だったとは言えなかった料理だったけど、あの時食べた
鳥の唐揚げは、それまで食べたどんな料理よりも美味しかった。
病弱で、いつも部屋から出られなかったあの人が、俺の為だけに作
ってくれたあの唐揚げを食べたあとじゃ、EMILYAの料理なんざ
生ゴミにしか感じられねーんだよ！

テーブルの上に整然と並べられた豪華な食事を、俺はテーブルごと
思い切りひっくり返し、胸の奥のしこりを吹き飛ばそうと試みた。
ガシャーンと勢いよくぶちまけられるのを冷めた目で見ながら、そ
れでも何もスッキリしない。するはずはなかった。

母さんは死んでしまった。

その残り少ない命をはやてに捧げて……

父さんも死んでしまった。

死んだ母さんの仇だと、はやてとヴォルケンリッターに逆恨みし、
狂い、最期は俺の手で……

でも、もういい、すまなかったな……と、最後の最期で正気に戻り、
笑って母さんのもとへと逝ってしまった。

両手を見る。

あの日、父さんを槍で刺し貫いた自分の両手を。

父の血に濡れた両手を……

クロノ、お前は最悪に馬鹿で嫌な奴だけど、言ってることだけは正しかったんだな。

本当、こんなはずじゃなかったことばかりだ……

俺には力がある。

第5次聖杯戦争のEIREI全ての力を合わせ持った力が。それでも成せないことがあるのだと、俺は知った。

「くっそおおおおおおおおおおおおっっっ！……！」

誰もいない家に響く、俺の慟哭混じりの絶叫。

握りしめた拳から血が滴り落ち、流れる涙は止まらない。

こうして、俺はこの家を、暖かい両親の思い出ばかりのこの家を、出ていくことを決めるのだった。

家に、火を放つ。もうこの家に戻ることはないから。

家族以外の誰かが、この思い出の家に入り込むのが嫌だから、こうして全てを灰にする。

思い出といっしょに、不退転の決意を胸に宿して。

「さようなら、母さん、父さん。俺は行くよ。俺みたい不幸な人間を一人でも多く助ける為に。だから、あの世で応援してくれよな……」

バチバチと火花舞い散る生家を目蓋に焼き付ける。

マスター、次元転移、準備整いました

古代ベルカの技術と最新のミッド式。

双方のイイトとこ取りで作った、この世界で唯一無二の宝具【グングニール・ブレイヴ】を天高く掲げる。

「なのは、フェイト、はやて、それにヴォルケンリッターのみんな…… 今度会う時は…… 敵だっ！！」

俺は母さんと父さんの死の切欠を作ったともいえる管理局を許さな

い！

あいつらがキチンと俺の言うことを聞いていれば、間違いなく犠牲者を出さずに闇の書事件を解決出来たのだ！

アイツらがっ、アイツらがっ、アイツらのせいであつ！

殺す覚悟も、殺される覚悟も持たない奴ら。

管理局なんて名称で、全次元世界を支配する傲慢どもっ！

俺が必ず滅ぼしてやる！！

「行くぞ！グングニール、セットアップ！ まずは、レジアスとの接触。続いてスカリエッティを協力者に、そして、管理局の崩壊を目指す……！！」

少年は旅立った。

その目に憎悪を宿して。

残された少女たちのその後を語ろう。

高町なのは……彼女は結局ミッドチルダへと渡りはしなかった。

あの日、初恋だった隣人の少年が成した罪を目の当たりにしてしまつたからだ。

母を死に追いやり、父を直接手に掛けたその姿を……

心に深い傷を負った彼女だったが、友人であるアリサ・バニングスと月村すずか、何より家族である高町家の暖かい支えにより立ち直つた。

そうしてなのはは高校卒業後、母の様な菓子職人を目指して渡欧した。

フェイト・T・ハラオウン……義理の兄と同じ管理局の執務官となる。

幼き日、自分の心を救ってくれた実父殺しの次元犯罪者を、激しい戦いの末逮捕する。

スカリエツティの改造を受け、精神を病んでしまった彼が自殺するまでの間、献身的に介抱し続けた。

それは初恋の君への変わらぬ想いからきたのか、それは誰にもわからない。

ただ、彼女は3人の子供を養子に迎えるだけで、生涯に渡り結婚することはなかった。

八神はやて……ヴォルケンリッターの直接的な被害者の存在が明るみに出たことにより、彼女の立場は果てしなく悪くなる。

シグナムの永久封印、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの魔力封印、そして彼女自身に架せられた行動制限及び監視。

自分のせいで幼馴染の少年の両親が死んでしまったのだと、後悔する日々を送り続ける。

その思いは生涯晴れることはなかったが、後に結婚、そして出産する頃には普通に笑って過ごせるようにはなった。

ただ、少年の両親への墓参は、死が訪れるその日まで欠かすことはなかったという。

「機動六課あゝ、はやく行かないと、NANOHAさんのOHAN
ASHIが始まっちゃうぜ。ていあなを助けてSEKKYOUだ
ー、ひゃっはー!」

この世界には無い筈の組織の名を呟きながら、身体を機械仕掛けに
改造された青年は歩く。

目に付く全てを憎悪する彼の本当は一体なんだったのだろうか？

青年自体が変えた筈の世界の変わりようを、決して受け止めること
なく、彼は彷徨い続ける。

青年を愛した彼女が、青年の目を覚ますその日まで。

はたしてそれが幸せなのか分からない。

彼が正気を取り戻したその日、彼は自らの命を絶ってしまったのだ
から……

レジアスルートもスカさんルートも甘くない(後書き)

これで終わりです。

予定よりも大分短め。

ホントははやてvsオリ主になる予定だったんだが、面倒くさ……
もとい冗長になるんで取りやめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453o/>

とある最低系オリ主の母の一生

2010年11月22日12時28分発行